

北海道近現代史研究会・第二回現地視察レポート

―北見市・佐呂間町・網走市を訪ねて

正木 浩 司

はじめに

近世期から現代に至る北海道史を多角的に再構築することを目的として、公益社団法人北海道地方自治研究所が設置する「北海道近現代史研究会」(主査〓押谷一・酪農学園大学教授)は、二〇二〇年十一月五日〜七日、北海道の北東部に位置するオホーツク地方を訪問し、第二回現地視察を実施した。^①

二〇二〇年八月実施の第一回現地視察では、道南の渡島半島の南端エリアに所在する数市町(函館市、松前町、江差町など)の史跡や施設などを訪れ、主に松前藩の歴史や幕藩関係、幕末期以降の口関係、箱館戦争などについて情報収集を行った。^②本稿で扱う第二回現地視察では、訪問先にオホーツク地方を選び、北見市と網走市の史跡・施設などをメインの視察先としながら、前回同様、

時間のゆるす限り、近隣の町でも視察を行ってきた。今次視察の大枠のテーマとしては、屯田兵および民間移民団による開拓、北方民族としてのアイヌ民族の歴史・文化、囚人労働などが念頭に置かれた。二〇〇六年三月の四市町合併を経て、一四〇〇平方^キ超という道内最大、全国四位の面積を有することになった現在の北見市には、四つの合併関係市町、すなわち、旧北見市、旧端野町、旧常呂町、旧留辺蘂町がそれぞれに蓄積してきた史料などが各所に残る。北見市の北側に境界を接する佐呂間町には、明治期に栃木県で発生した、いわゆる「足尾銅山鉍毒事件」により、同県内の諸村から移住してきた人々が開拓し、集落を形成した「栃木」という地名が現在も残る。網走市には、アイヌ民族の歴史・文化に関する知見を深めることができる著名な施設がいくつかあるほか、現在は観光施設としても内外に高い知名度を有す

る「博物館網走監獄」などもある。本稿はこの第二回現地視察について概括的に報告するものである。

1. 初日に予定外の北見市留辺蘂町地区へ

今回の視察では、研究会のメンバーは各自、日程一日目の夜までに北見市内に入り、二日目の朝に集合し、揃ってレンタカーで、北見市中心部、同市端野町地区、佐呂間町、北見市常呂町地区、網走市の順で各視察先を順に回っていくという段取りにした。

以上のような行程を計画しつつも、一日目の正午前に北見市に到着したメンバーも数名いたため、予定より早くレンタカーを借り、計画の中には位置づけていない近隣の史跡等を可能な限り視察することにした。とはいえ、使える時間は午後三〜四時間ほどと限りがあることから、この日

<付表> 第2回現地視察の主な視察先

第1日目(11/5)

	史跡・施設名	所在地
1	常紋トンネル工事殉難者追悼碑	北見市留辺薬町金華
2	真言宗白竜山遍照院	北見市留辺薬町泉369
3	常紋トンネル殉職者之墓	北見市留辺薬町宮下町126

第2日目(11/6)

	史跡・施設名	所在地
1	北光八幡神社	北見市北光306
2	ピアソン記念館	北見市幸町7丁目4-28
3	北網圏北見文化センター	北見市公園町1
4	端野町歴史民俗資料館	北見市端野町二区471-5
5	鎖塚の区域	北見市端野町緋牛内842-8
6	栃木神社	佐呂間町字栃木
7	佐呂間町開拓資料館	佐呂間町字永代町169
8	ところ遺跡の森	北見市常呂町字栄浦

第3日目(11/7)

	史跡・施設名	所在地
1	美幌博物館	美幌町字美禽253-4
2	博物館網走監獄	網走市字呼人1-1
3	北海道立北方民族博物館	網走市字潮見309-1
4	モヨロ貝塚館	網走市北1条東2丁目
5	網走市立郷土博物館本館	網走市桂町1丁目1-3

向かったのは、同市の中心部から西へ車で四〇分ほどの距離にある留辺薬町地区である。一日目の計画外の視察先に留辺薬町地区を選んだことには、時間的制約の他にも理由がある。研究会メンバーの一人が、同地区に住む旧留辺薬町役場の元職員の方と旧知の間柄であり、今回の視察の件を出発前に連絡したところ、急な話にもかかわらず、現地のガイド役を快諾してくれたからである。

旧留辺薬町の元職員、中川功氏は、同町役場を

二〇〇四年に定年退職したが、現役時代は町職員組合の立ち上げに関わり、委員長職も務め、様々な労働運動への取り組みを通じてその名を知られる御仁である。

筆者自身も中川氏とは以前より相互に面識をもつ関係にある。二〇〇二〜〇四年、町収入役の任にあった中川氏は、「留辺薬町地域通貨」や「愛町債」といった地域経済の活性化政策の推進で中心的な役割を果たしており、筆者はその取り組みを取材し、レポートを執筆・発表したことがあつた^③。町役場を退職した後の中川氏は、愛町債の経験などを土台しながら、第三セクター鉄道^④の存続運動などに携わり、全国に向けて積極的な発信を続けている。今回は思いがけず十数年ぶりの嬉しい再会となった。

2. 強制労働の歴史を秘める

「常紋トンネル」

今回、中川氏にガイド役を引き受けていただいたテーマは、大正初期めの一九一二〜一四年に石北本線・常紋トンネルの開削工事で行われた強制労働(タコ労働)という歴史的事実の周知、犠牲者の遺骨の発掘と供養に関する取り組み

みについてである。

常紋トンネル開削工事での強制労働にかかる犠牲者の遺骨の発掘・供養の取り組みは、一九七〇(昭和四五)年九月にトンネル内の工事で壁裏から人骨が見つかったことを契機に本格化したという。以降の取り組みを主導したのは、民衆史家の小池喜孝氏とされるが、この動きに先行して、地元では林隆弘尼ら真言宗白竜山遍照院の尼僧たちによる供養の実践があつた。林隆弘尼は強制労働の犠牲者を供養するために僧となった方であり、その取り組みは、常紋トンネルの犠牲者のみならず、後述する中央道路(旭川―網走)の開削工事で行われた囚人労働の犠牲者にも及ぶ。中川氏自身も先述の一九七〇年の人骨発見から、この活動に長年取り組んできているという。

視察一日目のこの日、中川氏の案内で訪れたのは、「常紋トンネル工事殉難者追悼碑」、「常紋トンネル殉職者之墓」、前出の真言宗白竜山遍照院



常紋トンネル工事殉難者追悼碑

など、同地区内の数カ所である。

追悼碑が町立金華小学校（一九七七年三月閉校）の跡地に建立されたのは一九八〇（昭和五五）年十一月のこと。その実現には、同年四月に発足した「常紋トンネル工事殉難者追悼碑建設期成会」の活動があり、当時、町職員組合委員長¹の立場にあった中川氏自身は期成会に事務局長として参画していた。追悼碑建立の経費は、期成会が集めた募金と町からの助成金によって賄われたという。碑背面に掲示の金属板に刻まれた「追悼碑の由来」は、常紋トンネルの開削工事に秘められた過酷な強制労働の歴史をわかりやすく説明している。以下、その引用である。

常紋トンネルは、大正元年から三年の歳月をかけ、本州から募集された人々の強制労働によって建設されました。工事の途上、粗食、重労働、リンチなどによって殉難された方がたは、百数十人以上と伝えられます。

この鉄道によって限らない恩恵を受けている私たちは、無念の死をとげた方がたを追悼し、北海道開拓の歴史から葬られてきた人びとの功績を末永く後世に伝え、ふたたび、人間の尊厳がふみにじられることのないよう誓いをあらたにしてこの碑を建立します。

追悼碑と同時に建立された殉職者之墓は、留辺薬町共同墓地（現・北見市立留辺薬墓地）内の一角にある。中川氏によると、墓の建立地が決定さ

れるまでには、地権者との交渉などで一定の苦勞があつたという。

今回、説明のなかで語られた中川氏の一言が強く印象残っている。「常紋トンネルのように、地元に運動があるところでは遺骨の発掘もある程度進んでいるが、地元²に運動がなく、まったく発掘が進んでいない地域もまだある」と。強制労働は北海道開拓の秘された歴史の一つであり、その全貌の解明はまだ道半ばであるとあらためて実感させられた。強制労働というテーマについては、後段で数回立ち戻ることになる。

3. 明治期以降の北見地域の行政区画の変遷

冒頭でも触れたとおり、現行の北見市は二〇〇六年三月の四市町合併によって誕生したが、この北見地域の歴史をさらに遡ると、明治期以降、分村や合併など、行政区画の再編を繰り返してきたところであることがわかる。

「北見市」という名の地方団体が発足（市制施行）したのは、一九四二（昭和一七）年六月のことであり、それ以前は「野付牛町」（一九一六（大正五年、町制施行）を名乗っていた。さらにその前身である「野付牛村」は、「地の果て」を意味するアイヌ語地名の「ノツケウシ」に漢字表記を充てて村名とし、一八七二（明治五年）年に発足している。市名にある「北見」は、一八六九（明治二年八月の蝦夷地から北海道への改称とともに設置さ

れた道内一一方国のうち、この地域を包含した「北見国」に由来する。北見国の域内には当時、宗谷、利尻、禮文、枝幸、紋別、常呂、網走、斜里の八郡が置かれていた。「北見」の名付け親は松浦武四郎で、現在の宗谷地方も含み、北の樺太も見渡せたという、武四郎自身の蝦夷地探査時の経験に由来している³。

明治期以降に進む北見地域の開拓において重要な役割を果たした主体は大きくは三つある。一つは屯田兵、二つは民間の移民団、三つは囚徒である。後段で再度触れるが、強制労働の一形態である囚人労働により、旭川と網走をつなぐ中央道路の一部をなす北見道路が開通したのは一八九一（明治二四年）年。この地域では、まず囚人労働によって幹線道路が通され、その数年後、民間の移民団と屯田兵が同じ一八九七（明治三〇）年に入植してきて、以降の開拓の中心的な推進主体になっていくという歴史が見て取れる。

屯田兵は、開拓使時代の一八七五（明治八）年に琴似（現・札幌市西区）への入植から始まり、一八九九（明治三二）年までの二四年間で、道内各地に計三二兵村を形成した。戸数にして計七三〇〇戸を超える。族籍上、前半は「土族屯田」、後半は「平民屯田」と、区別がある。

北見地域の場合、終盤の一八九七（明治三〇）年五月に三つの兵村が設立されている。野付牛（中野付牛）、相ノ内（上野付牛）、端野（下野付牛）の各兵村である。これに湧別兵村（後に南湧別と

北湧別に分割)を加えた四兵村を総称して「北見屯田」という。いずれもそれぞれ約二〇〇戸の平民屯田であり、沿岸防衛よりも内陸地の開拓が重視された屯田兵村であった。⁶⁾

4. 北光社とピアソン夫妻の事績を学ぶ

二日目の朝、研究会のメンバーが全員揃い、事前に立てた計画に従い、まずは北見市の中心部にある史跡・施設の視察へ出発した。

最初に向かったのは、JR北見駅から南西に車で一〇分ほどの距離にある「北光八幡神社」。市内を東西に流れる無加川と訓子府川の間に位置する。向かう途中に見かけた、野付牛自動車学校の看板の表記が印象に残る。同神社を訪れたのは、その境内に、「北光社」に関わるものも含め、開拓に関わる多数の石碑が建立されているからである。実際に訪れて、境内の石碑の多さには驚かされた。

「北光社」とは、一八九七(明治三〇)年五月、土佐(高知)からクンネツ原野に入植してきた民間の移民団が創設した会社名である。リーダー(社長)は土佐藩郷士の坂本直寛で、坂本龍馬の甥に当たる人物である。龍馬自身も北海道開拓に従事する夢を持っていたとされ、その夢は実際には彼の親族たちによって継承されたことになる。今回訪れた「北光八幡神社」は、明治期に入植者たちの心の拠り所として創建された神社であ

り、境内に掲示された由緒によると、「入植者の有志が、(中略)明治四十五年京都の八幡神社の総本宗男山八幡宮(現石清水八幡宮)に請願致し御分霊を奉戴致し同年九月十五日神霊を奉安せられたるをもって当社の創建の起源とする」とある。このような経緯により、同神社の境内には、北光社による北見開拓の事績を顕彰する記念碑が多数建立されている。その一つが「坂本直寛顕彰碑」であり、「一九八三年五月、日本キリスト教会北見教会の小池創造牧師が中心となって募金を呼びかけ、建立された」という。⁷⁾



北光八幡神社境内の北光社史跡 3つの碑の左が「坂本直寛顕彰碑」

直寛自身は入植から二年ほどで北見を離れ、浦臼に移住して「聖園農場」の経営に携わることになるが、北光社は前田駒次や沢本楠弥といった指導者たちのもとで北見地域の開拓を続け、寒冷地の厳しい風土や水害などに苦しみながらも、大正期までに広大な農場を開拓・整備し、これが現在の北見市の市街地や農地の礎となっているという。なお、坂本家の北海道開拓の事績を伝えることを目的とする施設「北海道坂本龍馬記念館」が、NPO法人によって函館市内に開設・運営されていることは、第一回現地視察のレポートで紹介したとおりである。

神社を去り、次に向かったのは「ピアソン記念館」という施設である。JR北見駅から西に車で五分ほどの距離の丘の上にある。

先述した北光社の指導者たちを特徴付ける要素としては、土佐の自由民権運動への関わりと、クリスチャンであることが挙げられる。施設名にある「ピアソン」とは人名であり、アメリカ人のキリスト教(プロテスタント系)の長老派教会、宣教師であるジョージ・ベック・ピアソン(George Peck Pierson 1861-1939)とアイダ・ゲップ・ピアソン(Ida Goepf Pierson 1862-1937)の夫妻のことである。この施設は元々は夫妻の私邸であった。ピアソン夫妻は一八九四(明治二七)年に北海道に渡ってきて、アイヌ集落も含め道内各地での宣教活動に取り組んだ。野付牛村に移住してきたのは一九一四(大正三)年のことで、この地が日



ピアソン記念館の外観

本で最後の活動拠点となった。夫ジョージは旧約聖書の註解書、通称「ピアソン聖書」の編纂、妻アイダ・ゲップは旭川での廃娼運動などでも知られ、後者には前出の坂本直寛も協力したという。北見を最後の拠点とした夫妻の日本での宣教活動は一九二八（昭和三）年まで続いた。

現在の「ピアソン記念館」は、一九七〇（昭和四五）年に北見市によって修復されたもので、同年五月より夫妻の事績に関する資料館として開館されている。一九九六（平成八）年七月八日に「北見市指定文化財」（第一〇号）に指定、二〇〇一

（平成一三）年には「北海道遺産」（第一回選定分、第二二号）に選定されている。二〇〇四（平成一六）年四月に公の施設の指定管理者制度が適用となり、以降は「NPO法人ピアソン会」^⑧が指定管理を続けている。入場は無料で、記念館に常駐するピアソン会の関係者がガイドをしてくれる。

キリスト教各宗派の派遣する宣教師たちに限らず、神道や仏教の関係団体も含め、北海道開拓において宗教ないし宗教団体の果たした役割や影響などについては、別の機会に詳しく探求したいテーマである。

5. 囚人労働の歴史を伝える「鎖塚」

ピアソン記念館の視察を終えると、野付牛公園の一面に立地する「北網圏北見文化センター」内の博物館、端野町地区にある「端野町歴史民俗資料館」^⑩を順に訪れ、北見市や旧端野町の開拓の歴史や自然を学び、次に強制労働問題の象徴的な史跡へと向かった。北見市指定文化財「鎖塚の区域」である。ここには現在、「土饅頭」とも呼ばれた三基の塚が保存され、その脇に「鎖塚供養碑」と数体の仏像（観音像一体、地藏尊六体）などが建立されている。前出の小池喜孝氏による著書『鎖塚 自由民権と囚人労働の記録』は、この塚に秘められた北海道開拓史の一面を紹介した問題提起の書である。

「鎖塚の区域」は、端野町地区の中心部から国



鎖塚の区域

道三九号線を北東へ車で三〇分ほど走った先、緋牛内地区にある。国道を逸れて道道一〇四号線に入ると、程なく眼前に広大のどかな耕作地の風景が開ける。この北海道らしい風景の中を数分進むと、路傍の細長いスペースに並んだ供養碑、六地藏、塚が見えてくる。

前出の「北網圏北見文化センター」内の博物館には、復元された北見屯田の屯田兵屋が展示されている。この兵屋を回り込んださらにその奥、館最奥の壁面に、一つの重要な展示があった。「北海道開拓と強制労働」というタイトルの付された

展示である。この説明文の中に「北海道で行われた強制労働形態」として、以下の四つが紹介されていた。すなわち、①アイヌ人強制労働、②囚人労働、③タコ労働、④外国人労働である。タコ労働は、甘言による勧誘・前借、隔離・拘禁状態に置いた募集人夫を労働力としているのに対し、囚人労働は、囚人外役の形をとりながら、実質は「使い捨ての労働力」として過酷な労働を強いるものである。第二節で紹介した常紋トンネルの開削工事ではタコ労働が行われたのに対し、緋牛内地区の「鎖塚」は囚人労働に関わる。北海道開拓の歴史においては、一八八一（明治一四）年頃から道路の開削工事、硫黄山の資源採取、炭砒労働などに囚人労働の活用が推奨され、これが明治二〇年代末に廃止された後、タコ労働に切り替えられていく流れがあった。いずれにしても、人権無視の過酷な環境下での労働を強いるものであり、その中で斃れた囚徒や人夫の遺体は、墓所ではなく、路傍などに埋葬された。埋葬場所の「土饅頭」は、そこから囚徒が逃亡防止のために装着されていた鎖が出てくること由来し、「鎖塚」と呼ばれるようになったという。前出の「端野町歴史民俗資料館」では鎖の再現物を見ることができている。

緋牛内地区にある「鎖塚供養碑」は、中央道路（旭川―網走間、二二〇^キ）の開削工事のうち、その一区間である北見道路（網走―北見峠間、約一六三^キ）の開削工事に従事し、犠牲となった囚徒たちを供養するものである。供養碑および六地藏は

旧端野町の開基八〇周年を機に一九七六（昭和五一）年一〇月に建立されたものである。旧端野町教育委員会（現・北見市教育委員会）が「鎖塚の区域」を町指定文化財（有形文化財（史跡）に指定した際（一九九二年二月二七日指定）に設置した説明看板には以下のように記されている。

明治24年（1891）、網走・上川間に中央道路が開削された。この工事には1500人ももの鉋路集治監の囚人が使役されたが、4月から12月という短期間に約163kmもの距離を開削するという突貫的な難工事のため200人以上の囚人が倒れて亡くなった。

この鎖塚の土饅頭はそのとき亡くなった囚人の墓標のひとつとされている。ただし地形の変化等があり、その形状については現在よりもかなり低かったと考えられる。

端野町の開拓は明治30年（1897）の屯田兵の入りにより、本格的に始まったが、その入地に至る道路はこの工事によって作られた。

右の引用文にある「鉋路集治監の囚人」とは、この工事のための労働力として鉋路集治監（標茶町、一八八五（明治一八）年開設）から移送されてきた一二〇〇人の囚徒である。その際、工事の拠点として設置されたのが「鉋路監獄署網走囚徒外役所」であり、これが現在の網走刑務所の始まりである。網走刑務所、その前身である網走監獄については後段で再度触れる。

右の引用文にある「鉋路集治監の囚人」とは、この工事のための労働力として鉋路集治監（標茶町、一八八五（明治一八）年開設）から移送されてきた一二〇〇人の囚徒である。その際、工事の拠点として設置されたのが「鉋路監獄署網走囚徒外役所」であり、これが現在の網走刑務所の始まりである。網走刑務所、その前身である網走監獄については後段で再度触れる。

右の引用文にある「鉋路集治監の囚人」とは、この工事のための労働力として鉋路集治監（標茶町、一八八五（明治一八）年開設）から移送されてきた一二〇〇人の囚徒である。その際、工事の拠点として設置されたのが「鉋路監獄署網走囚徒外役所」であり、これが現在の網走刑務所の始まりである。網走刑務所、その前身である網走監獄については後段で再度触れる。

右の引用文にある「鉋路集治監の囚人」とは、この工事のための労働力として鉋路集治監（標茶町、一八八五（明治一八）年開設）から移送されてきた一二〇〇人の囚徒である。その際、工事の拠点として設置されたのが「鉋路監獄署網走囚徒外役所」であり、これが現在の網走刑務所の始まりである。網走刑務所、その前身である網走監獄については後段で再度触れる。

右の引用文にある「鉋路集治監の囚人」とは、この工事のための労働力として鉋路集治監（標茶町、一八八五（明治一八）年開設）から移送されてきた一二〇〇人の囚徒である。その際、工事の拠点として設置されたのが「鉋路監獄署網走囚徒外役所」であり、これが現在の網走刑務所の始まりである。網走刑務所、その前身である網走監獄については後段で再度触れる。

6. 足尾銅山鉱毒事件につながる佐呂間町栃木地区

北見市の中心部と端野町地区での各所の視察を終え、同地区にある蕎麦屋で昼食休憩を済ませると、国道三三三号線を通って北西へ移動。四〇分ほどで佐呂間町の南西部にある栃木地区に到着した。めざしたのは、その敷地内に記念碑などが建立されている「栃木神社」である。

佐呂間町の開基は一八九四（明治二七）年の和人（青森出身の鈴木甚五郎）の入植とされ、これ以降、一九五〇年代まで分村と改称をくり返してきている。「佐呂間町」という名の団体が最初に現れるのは一九五三（昭和二八）年だが、現行の佐呂間町は一九五六（昭和三一）年九月の若佐村との合併によって誕生したものである。

町の南西部に置ける栃木地区は、かつてはサロマベツ原野と呼ばれたところだが、一九一一（明治四四）年四月、日本初の公害事件とされる足尾銅山鉱毒事件で罹災し、困窮状態に陥った栃木県谷中村などの住民たち（六六戸・約二四〇人）が入植し、開拓を進め、故郷の名を冠する集落を形成した土地である。町ウェブサイトに、「東、南、西を山々に囲まれた北面斜面に位置し、平地が少なく標高の高い大地」、「オホーツク海からの北風がまともに吹き込む佐呂間町内で最も雪解けが遅い場所」と書かれている。開拓を進めるには決し



栃木神社

十五日この地を栃木神社とした」とある。現在は栃木公民館が隣接するほか、先述のとおり、境内には栃木地区の開基を記念する二つの碑が建立されている。一つは「栃木開基百周年記念之碑」（二〇一一年建立）、もう一つは「開基五十周年記念碑」（一九六〇年建立）である。後者には「栃木部落の沿革」と題する長めの碑文が刻まれており、移住の原因となった足尾銅山鉱毒事件の推移、罹災した農民たちと共に谷中村の廃村を進める国家権力と闘った田中正造代議士の功績、栃木から佐呂間への移住時の状況などを説明し、この地の開拓に携わった先人たちの苦難を偲び、その功績を讃えている。

同神社の視察を終えると、「佐呂間町開拓資料館」の見学を経て、道道七号線を北東方面へ向かい、サロマ湖の東端を掠って、オホーツク海を臨む北見市常呂町地区へと抜けた。すでに午後三時を回っており、終業間近の「ところ遺跡の森」に滑り込み、オホーツク文化に属する「常呂遺跡」の集落遺跡群や、敷地内の三施設の見学を足早に済ませた。この日の行程はここで終了とし、国道二三八号線を南下して、宿泊先のある網走市へと向かった。

7. 囚人労働問題の発信拠点「博物館網走監獄」

明けて三日目は、帰りの特急電車が出る夕方まで、可能な限り網走市内の各所を回るといふ計画

を立てていたが、この日はまず、同市から南へ車で一時間ほどの距離にある美幌町まで足をのび、「美幌博物館」を視察した。同町への移住者数の出身県別の内訳などの展示が特に印象に残る。退館後、午前のうちに美幌町から網走市へとつて返すと、同市呼人地区、天都山の網走湖側に立地する市内屈指の著名な博物館の一つに向かった。「博物館網走監獄」である。

博物館の公式ウェブサイトの説明によると、こは「公益財団法人網走監獄保存財団」が設立・運営する「網走刑務所旧建造物を保存公開する野外歴史博物館」であり、「網走国定公園の景勝天都山網走湖側に位置し、敷地面積は約東京ドーム三・五個分に相当」とある。

同じく公式ウェブサイト掲載の「施設概要」で基本情報を補足すると、開業日は一九八三（昭和五八）年七月六日（「博物館法」による登録博物館認定は一九九六（平成八）年六月一四日）で、三〇年近い歴史を有する。敷地面積は、事業地だけでも一六万九二六四平方メートルと広大だが、加えて事業地外として隣接地、井水用地など一一万四〇七平方メートルも有する。敷地内には移築建築物と再現建築物が整然と並べられ、建築面積は三八件一万二二八〇平方メートルに及ぶ。移築建築物には重要文化財と登録文化財も含まれる。資料総数は一万点とある。

博物館が保存・公開するのは、先述のとおり、網走刑務所（網走市字三眺）の旧建造物である。

て条件の良い場所ではないことが即座に読み取れる。地区人口は一九四七（昭和二二）年の六五一人をピークに、二〇一五年国勢調査では二三世帯七八人にまで減少している。視察当日も人や車に出くわすことはなく、静寂の中に農地や牧場、森林が広がっているという状況であった。

今回訪問した「栃木神社」は、境内に掲示された由来によると、「明治四十四年四月三日に入植した栃木県足尾銅山鉱毒罹災者六十六戸の心のよりどころとして故郷宇都宮市二荒神社より大物主命・事代主命・三穗姫命の御祭神を移し同年六月

同刑務所は、本稿第五節でも若干触れたとおり、以下のように施設名の変更、関係施設の開設の歴史を経ている。

一八九〇（明治二三）年 「釧路監獄署網走囚徒外役所」として開設

一八九一（明治二四）年 「北海道集治監網走分監」に改称

一八九六（明治二九）年 「二見ヶ岡構外泊込作業場」開設

一九〇三（明治三六）年 「網走監獄」に改称

一九二二（大正一一）年 「網走刑務所」に改称

一九二四（大正一三）年 「住吉構外泊込作業場」開設

一九五六（昭和三一）年 「切通構外泊込作業場」開設

網走刑務所は一九七三（昭和四八）年から施設の全面改築工事が始まり、一九九三（平成五）年までの二〇年をかけてこれを完了した。これによって役目を終えた旧建造物が本博物館の敷地内に移築もしくは再現され、野外展示物として現在公開されていることになる。このうち「旧網走監獄庁舎」、「旧網走監獄舎房及び中央見張所」、「旧網走監獄教誨堂」、「旧網走刑務所二見ヶ岡刑務支所」が国の重要文化財の指定を受けている。

網走市では、一九七二（昭和四七）年を開基一〇〇年としていることから、一八七二（明治五

年の北見国網走郡内における「アバシリ村」の設置を開基と定めていることになる。その後、漢字を充てた「網走村」への改称（二八七五年）、近隣村との合併を経ての二級町村制施行による「網走町」への改称（一九〇二年四月）を経て、市制施行して網走市となるのが一九四七（昭和二二）年二月のことである。

博物館内の展示によれば、釧路監獄署網走囚徒外役所の設置に伴い、中央道路開削工事の囚人労働に使役されることになる二二〇〇人の囚徒がやって来て、それまでは小さな漁村であった網走村は大きく変貌したとある。網走市の開基以来の形成史の中で、刑務所の設置が大きな転機の一つとなったのは確かであろう。

本博物館では、旧建造物の野外展示のほか、館内展示の史料・資料も膨大な数に上る。これらが伝えるのは網走監獄・刑務所の歴史であるが、それは施設としての歴史だけではなく、囚人労働の事実を伝え、内外に発信するものでもある。「旧庁舎」内のパネル展示や映像では、北海道開拓の中で道内各地の集治監（樺戸、空知、釧路、網走）の囚徒たちが動員された囚人労働の歴史について概括的に学べるほか、「監獄歴史館」では主に網走監獄の囚徒が関わった中央道路開削工事の過酷な実態について展示資料や体感シアターなどでさらに深く学ぶことができる。館内のパネル展示の一つとして、囚人労働の苛烈なイデオロギーを象徴する当時の政府関係者の言葉が掲げられて

おり、特に強い印象が残る。以下に引用する。

・ 山県有朋 「懲戒苦役堪へ難キノ労苦ヲ与へ、罪因ヲシテ囚獄ノ畏ルベキヲ知り、再ビ罪ヲ犯スノ悪念ヲ断タシムルモノ、是レ監獄本分ノ主義ナリトス」（『苦役本分論』抜粋）

・ 金子堅太郎 「元々彼等は暴民の悪徒であつて、尋常の工夫では耐えられぬ苦役を充て、これにより斃れても、監獄費の支出が減るわけで、万やむを得ざる政略なり」（『北海道三県巡視復命書』要約）

年間二〇万人もの入館者が訪れ、今となつては観光施設としてのイメージも強いが、今回の視察を通じて、本博物館が北海道開拓における囚人労働の問題を発信する拠点施設であることをあらためて実感させられた。運営団体が編集・発行に関わる二つの書籍、『博物館網走監獄』（二〇〇二年）、『資料 北海道監獄の歴史』（二〇〇四年）も大いに参考になる。

8. 北方民族という視点からアイヌ民族を理解する

広い「博物館網走監獄」の見学を一通り終えると、施設受付前に隣接する「監獄食堂」で昼食休憩をとり、ここを後にした。

次の目的地は、曲がりくねった天都山の山道を進み、山の頂上近く、車で数分の距離にある「北

北海道立北方民族博物館」である。訪問時はちょうど、特徴的な形状をしたガラス張りの天井部をもつエントランスが改修工事中で、通用口から出入りすることになっていたが、北海道の美術館・博物館では「芸術週間」の期間中に当たり、常設展示の入場料は無料とされていた。

北方民族博物館は、公式ウェブサイトによれば、①北海道を含めた北方諸地域の厳しい自然環境に適応してきた人びとの文化的特徴、その歴史的形成過程、民族間の相互関係などを実証的に調査研究し、これらの成果を展示し、普及すること、②それにより、道内博物館のセンター的な役割を担う博物館として、北海道の文化の振興と国際交流の推進に寄与すること、③北方地域に生活する民族の文化と歴史を研究し、あわせてひろく道民のこれら民族への理解を深めること、を設立趣旨・目的として、一九九一年（平成三年）二月一日に開業した。その名のとおり道庁が設立した施設だが、二〇〇六年以降は公の施設の指定管理者制度が適用され、「一般財団法人北方文化振興協会」が現在受託している。

「北方民族」とは、館編集・発行の『総合案内』によると、地球の北半球の主に寒帯や亜寒帯気候の地域に暮らし、自然環境や歴史的条件に応じて、それぞれの地域の特徴を生かしながら伝統的な生活を送ってきた諸民族とされ、ユーラシア大陸の二〇民族と北アメリカ大陸の一八民族、計三八民族が例示されている¹⁸。前者にはアイヌ民族（北海



北海道立北方民族博物館の外観

道アイヌ、千島アイヌ、樺太アイヌ）、樺太（サハリン）北部に生活したウイルタやニブフが含まれる、後者にはイヌイト（エスキモー）などが含まれる。館に収蔵されるのは、各地で収集した北方諸民族の衣服、狩猟具、祭具、玩具など、生活に関する資料であり、その数は約八五〇〇点に上るといふ¹⁹。

視察二日目の最後に視察した「ところ遺跡の森」は、六〇一―一世紀に北海道の北部から東部にかけての地域で展開した「オホーツク文化」、特にこれに属する「常呂遺跡」を紹介する施設であった



北方民族博物館内、各民族の衣装の展示
前列手前から3番目がアイヌ民族のもの

が、本博物館にもオホーツク文化を「海の狩猟文化」と特徴づけ、詳しく紹介するコーナーが設けられている。オホーツク文化は、歴史上は縄縄文化時代から擦文文化への移行期間に位置し、擦文文化と融合しこれに呑み込まれるかたちで消滅したされるが、アイヌ民族の文化にも何らかの影響を及ぼしたとされる。

次に向かった「モヨロ貝塚館」も、オホーツク文化に関わる考古学的発見である「最奇貝塚」を紹介する施設であり、その展示内容は「ところ遺跡の森」や「北海道立北方民族博物館」などで得た知見を補

強するものである。モヨロ貝塚は、約一三〇〇年前に今の網走の地に暮らした、北からの渡来民族モヨロ人の集落跡とされる。一九一三（大正二）年に青森出身の在野の考古学者、米村喜男衛よむらきおえによる遺跡の発見を機に発掘が始まった。「モヨロ貝塚館」は一九六六（昭和四一）年に開設され、現行施設は二〇一三年にリニューアルされたもの。オホーツク海に注ぐ網走川河口の地に、後述する「網走市立郷土博物館」の分館として開設されている。館内展示は、海の狩猟民モヨロ人の住居、生活文化などを詳しく紹介する。個人的には、オホーツク海を中心とした



モヨロ貝塚館の外観

異なる文化圏の分布状況（オホーツク文化、トカレフ文化、古コリヤーク文化、タリヤ文化など）を示した地図が興味深かったが、それは互いの影響関係や交易関係の有無など、想像力を大いにかき立てられたからである。

先住民族としてのアイヌ民族の歴史・文化について、歴史的・地理的な先入観を免れて、中立的に理解を深めていくために、「ユーラシア北方民族の一員としてのアイヌ民族」、「オホーツク文化などの古代史とアイヌ民族史の関係」といった視点は不可欠であると思われる。「ところ遺跡の森」、



網走市立郷土博物館本館の外観

「北海道立北方民族博物館」、「モヨロ貝塚館」などの所蔵する膨大な資料・史料群は、そのために必要かつ有意義な情報を提供してくれるものである。貝塚館を去ると、今次視察の最後の訪問先として、本館の「網走市立郷土博物館」を訪れた。本館は、前出のモヨロ貝塚の発見者である米村喜男衛が、自ら収集した三〇〇〇点もの考古・アイヌ民族資料を提供し、これを基礎として一九三六（昭和一一）年に開設した「北見郷土館」が前身である²⁰。市立博物館らしく、館内の展示物は古代から現代に至る網走の自然・文化、開拓の歴史などにかかる幅広いジャンルを網羅している。

大正から昭和に活躍した建築家・田上義也の設計による本館および隣接する新館（一九六一年増築）の建物は、国の登録有形文化財（建造物）の指定（二〇一九年二月五日指定）を受けている。

9. まとめに代えて

冒頭で、今次視察の大枠のテーマとして、屯田兵および民間移民団による開拓、北方民族としてのアイヌ民族の歴史・文化、囚人労働などが念頭に置かれたと書いたが、初日に計画外視察として行った常紋トンネルでの強制労働問題に関する史料等の視察の後、タコ労働もしくは囚人労働に関係する史料・施設が、二日目の「鎖塚の区域」、三日目の「博物館網走監獄」と、入れ替わり立ち替わり眼前に現れ続け、このテーマの広がりや深

<資料> 明治期の北海道内における囚人労働による開削道路一覧

	区間(地名)	距離(km)	工事期間	現在の道路名	実施監
1	樺戸—当別	21.2	1882年～1883年	—	樺戸
2	市来知—忠別太	56.1	1886年5月～8月	国道12号	樺戸
3	樺戸—オソキナイ	12.4	1887年4月～11月	—	樺戸
4	標茶—厚岸	38.1	1887年4月～1888年11月	道道1020号	釧路
5	樺戸—市来知	18.2	1887年5月～11月	道道21号	樺戸・空知
6	市来知—忠別太	88.0	1887年9月～1889年11月	国道12号	樺戸・空知
7	市来知—幾春別	44.6	1887年12月～1891年3月	—	空知
8	樺戸—当別	21.2	1888年1月～12月	—	樺戸
9	樺戸—増毛	101.4	1888年4月～1892年	道道893号	樺戸
10	標茶—釧路	34.5	1888年9月～1889年11月	国道391号	釧路
11	岩見沢—市来知	37.0	1888年12月～1890年6月	国道12号	空知
12	岩見沢—夕張	23.2	1889年10月～1890年8月	—	空知
13	跡佐登—網走	38.4	1890年8月～11月	国道391号	釧路
14	忠別太—北見峠	60.5	1890年～1891年11月	国道12号・39号	空知
15	網走—北見峠	162.8	1891年5月～11月	—	網走
16	大津—芽室	46.6	1892年5月～1894年3月	国道38号	釧路

※ 重松一義『史料 北海道監獄の歴史』45頁掲載の表2をもとに、2021年3月、正木作成。

※ 距離は、里・町・間を単位とする表記をkmに換算した。小数点第2位以下四捨五入。

さ、あるいはその重大性を段階的に開示されていくかのようであった。タコ労働や囚人労働に関する情報は北見・網走地域に限ったものではなく、例えば「月形樺戸博物館」(樺戸郡月形町月形)など、他の地域の関係施設においても公開・発信が行われており、将来的にはこれらの視察も実施して、当研究会として全道的な実態の把握にも努

めていきたいと考えている。一方、今回の視察では、「北見屯田」や「北光社」の入植の歴史について一定の学びを得た。特に、屯田兵や移民団が沿岸の網走から内陸の北見に分け入っていくために、これらに先行して、囚人労働による中央道路の整備が必要とされたという関係が整理され、このことが今回の最も大きな収穫

だったかもしれない。北海道の歴史の影に隠された、開拓の先陣にして犠牲者という視点に立つ囚人労働の実態解明は、これからの客観的な北海道史研究において重要な軸として関心が注がれるべきである。

また、今回は佐呂間町の栃木集落を初めて訪問し、何年も前にテレビ番組で見た、「開基五十年記念碑」の碑文に「田中正造」の文字を確認できたことで個人的に感慨に浸ってきた。公共哲学を専門とする山脇直司氏(東京大学名誉教授)は、著書の中で田中正造を取り上げ、「…「公共協力相愛」という理念をもとに、町や村の自治のあり方を根本的に考え直した」と評している。足尾銅山鉱毒事件罹災住民の佐呂間移住という歴史的事実をどう受け止めるかは、公害問題のみならず、現代においても国・自治体間関係や自治のあり方を考える上で重要なテーマであろう。

さらに、先住民としてのアイヌ民族の歴史・文化や自治に関する調査・研究は、当研究会にとっても基軸テーマの一つであるが、先史時代や古代史の領域にはやや消極的であったところ、今回の視察で「ところ遺跡の森」や「北海道立北方民族博物館」、「モヨロ貝塚館」といった諸施設を回ったことで、その重要性にあらためて気づかされた。民族史の時間的スケールからすれば、古代と近代の区分などに必要以上に囚われるべきではないと反省しつつ、この反省を今後の取り組みに生かしていきたいと考えている。

当研究会としては、引き続き道内を中心とした現地視察を計画している。第三回以降も豊かな学びや気づきに恵まれることを期待している。

【注】

- (1) 二〇一九年四月に「北海道史研究プロジェクト」の名で発足し、二〇二〇年四月から「北海道近現代史研究会」に改称した。メンバーは、押谷一（酪農学園大学教授／当研究所理事／当研究会主査）、竹中英泰（旭川大学名誉教授／当研究所理事）、三輪修彪（北海道労働文化協会理事／当研究所元専務理事）、正木浩司（当研究所研究員／当研究会事務局）。第二回現地視察に参加したのは、押谷、三輪、正木の三名。本稿の執筆は正木が担当した。
- (2) 正木（二〇二〇）。
- (3) 自治研中央推進委員会事務局発行『月刊自治研』第五二九号（二〇〇三年一〇月号）一三〇～二二頁所収「小さな自治に学ぶ（6）北海道留辺蘂町」。
- (4) 谷本（二〇二〇）六頁。
- (5) 本段落の記述は、有馬（二〇二〇）四八頁を参照した。
- (6) 本段落の記述は、有馬（二〇二〇）二〇一～二〇五頁を参照した。
- (7) 『朝日新聞デジタル』（二〇一三年四月二三日付）掲載の記事「わがまち遺産」坂本直寛顕彰碑（北見市）による。
- (8) 特定非営利活動法人ピアソン会は、二〇〇二年一月二四日に法人の設立認証を受け、法人の主

たる事務所の所在地をピアソン記念館の所在地（北見市幸町七丁目四番一八号）としている。

- (9) 一九八四（昭和五九）年一月に開業した北見市立の複合施設。現在は科学館、博物館、美術館から成る。二〇〇六年より公の施設の指定管理者制度が適用されており、「株式会社オホーツク美装興業」が現在受託している。
- (10) 旧端野町が一九八三（昭和五八）年に開設した施設。館内の展示物は、明治期に入植した屯田兵に関する史料・資料が中心である。開館期間は五月～一月で、冬季は休館となる。普段は施設されておき、入館希望者は隣接する市立端野図書館での手続きが必要である。
- (11) 栃木地区のピーク時の人口については、佐呂間町ウェブサイトの掲載のパンフレット『北海道佐呂間町栃木』の掲載情報による。
- (12) 佐呂間町が一九八五（昭和六〇）年に開設した施設。町の開拓資料を収集・展示する。普段は施設されておき、入館希望者は近隣の佐呂間町民センターでの手続きが必要である。
- (13) 国指定史跡「常呂遺跡」の一部を見学用に整備・公開したもの。野外に縄文時代・続縄文時代・擦文時代の集落遺跡を公開するとともに、出土品などを展示する施設として、敷地内に「ところ遺跡の館」（一九九三年開設、「ところ埋蔵文化財センター」（一九九八年開設、東京大学大学院附属「常呂資料陳列館」（一九七三年開設）が設置・公開されている。

(14) 美幌町が一九八七（昭和六二）年に開設した施設。町の歴史、自然、芸術をテーマとした総合博物館として設置・運営されている。

- (15) 以下、網走刑務所の沿革については、法務省札幌矯正管区ウェブサイトに掲載のPDFファイル「網走刑務所」の情報を参照した。
- (16) 本文で後述する「監獄歴史館」内に掲示されたパネル展示「網走に監獄がやってきた」の記述による。
- (17) 北海道立北方民族博物館（一九九三）三頁の内容を要約。
- (18) 前掲書一三頁。
- (19) 前掲書三頁。
- (20) 網走市ウェブサイト掲載の「郷土博物館プロフィール」の記載内容による。
- (21) NHK・Eテレ「日本人は何を考えてきたのか 第三回 森と水と共に生きる／田中正造と南方熊楠」(初回放送二〇一二年一月二日)。
- (22) 山脇（二〇〇四）九八～一〇〇頁。

【参考文献・資料】

- ・ 有馬尚経「屯田兵とは何か その遺跡と変遷」幻冬舎、二〇二〇年七月
- ・ 伊藤悟編「写真集「ピアソン夫妻の足跡」NP
- ・ 色川大吉『自由民権』岩波書店・岩波新書、一九八一年四月

- ・ 小池喜孝『鎖塚 自由民権と囚人労働の記録』岩波書店・岩波現代文庫、二〇一八年六月
- ・ 小田清「北海道開拓から開発へ―産業資本の移植・形からその特徴を考える」(『北海道自治研究』第六二四号二〜二五頁所収) 公益社団法人北海道地方自治研究所、二〇二一年一月
- ・ 重松一義『博物館網走監獄』網走監獄保存財団、二〇〇二年一月
- ・ 重松一義『史料 北海道監獄の歴史』信山社、二〇〇四年一月
- ・ 司馬遼太郎『街道をゆく(15) 北海道の諸道(新装版)』朝日新聞出版・朝日文庫、二〇〇八年一月
- ・ 常紋トンネル工事殉難者追悼碑建設期成会編『トンネルの壁のなかから―常紋トンネル工事殉難者追悼碑完成記念誌』中川功方、一九八三年一月
- ・ 谷本晃久「北海道開拓の光と影―「開拓」と「地方自治」をめぐる」(『北海道自治研究』第六一四号二〜二五頁所収) 公益社団法人北海道地方自治研究所、二〇二〇年三月
- ・ 布川清司『人と思想(50) 田中正造』清水書院、一九九七年五月
- ・ 北海道坂本龍馬記念館編『北海道の坂本龍馬紀行(弐) 龍馬の遺志を継いだ人々』北海道坂本龍馬記念館、二〇〇九年
- ・ 北海道立北方民族博物館編『北海道立北方民族博物館 総合案内』北海道立北方民族博物館、一九九三年三月

【参照ウェブサイト】

- ・ 正木浩司「北海道近現代史研究会・第一回現地視察レポート―函館市・松前町・江差町を訪ねて」(『北海道自治研究』第六二二号一〇〜一六頁所収) 公益社団法人北海道地方自治研究所、二〇二〇年一月
 - ・ 山下重一「坂本直寛の生涯と行動」(『英学史研究』第二二号一九〜三五頁所収) 日本英学史学会、一九七九年
 - ・ 山脇直司『公共哲学とは何か』筑摩書房・ちくま新書、二〇〇四年五月
 - ・ 網走市役所〈網走市統計書
<https://www.city.abashiri.hokkaido.jp/030shisei/020oukei/010oukaisyo/>
 - ・ 網走市役所〈網走市立郷土博物館
<https://www.city.abashiri.hokkaido.jp/270kyoiku/050kyoundo/>
 - ・ 北見市役所〈北見市の生い立ち
<http://www.city.kitami.lg.jp/docs/2016062000139/>
 - ・ 北見市役所〈指定管理者制度導入施設一覧
<https://www.city.kitami.lg.jp/docs/2015021200054/>
 - ・ 北見市役所〈端野町歴史民俗資料館
<http://www.city.kitami.lg.jp/docs/2016062800067/>
 - ・ 北見市役所〈よつごねーとーの遺跡の森へ
<https://www.city.kitami.lg.jp/docs/7209/>
 - ・ 佐呂間町役場〈もう一つの栃木
<https://www.town.saroma.hokkaido.jp/shoukai/saromanorekisi.html>
 - ・ 東京大学大学院人文社会系研究科附属 北海文化研究常呂実習施設・常呂資料陳列館
<http://www.1-u-tokyo.ac.jp/tokoro/>
 - ・ 博物館網走監獄公式サイト
<https://www.kangoku.jp/>
 - ・ ピアソン記念館&NPO法人ピアソン会
<http://www.npo.pierson.org/>
 - ・ 美幌町役場〈美幌博物館
<http://www.town.bihoro.hokkaido.jp/bunya/museum/>
 - ・ 法務省・札幌矯正管区〈北海道内の矯正施設紹介情報
http://www.moj.go.jp/kyousei/kyousei09_00001.html#menu6
 - ・ 北網圏北見文化センター
<https://hokunouken.com/>
 - ・ 北海道立北方民族博物館公式サイト
<http://hoppohm.org/index2.htm>
 - ・ モロロ貝塚館
<http://moyoro.jp/>
- ※ 最終閲覧は、二〇二二年二月二五日。
- 〈まろろ ほんご〉公益社団法人北海道地方自治研究所研究員